

叡啓大学（広島市）は課題解決演習などの体験型授業を軸に、社会をより良く前向きに変える原動力となる「チェンジメーカー」を育成する。2021年に開校したソーシャルシステムデザイン学部（広島県立の単科大だ。授業はほぼすべて日英両言語で開講され、学生の20％は留学生が占めるなどグローバルな環境もそろつて）

必修科目の課題解決演習では、地域企業などが抱え

叡啓大学 ソーシャルシステムデザイン学部

社会を変える人づくりに力

る課題に学生が向き合う。課題設定や要因分析から解決策の立案まで、学生自身がチームを組んで課題解決に一貫して取り組む。試行錯誤をしながら実践・応用することで、新たな価値を創造する。

叡啓大学の授業は従来の講義型は2割程度で、体験型が8割を占める。「能動的に自ら『このことを知りたい』という形で知的な好奇心を育てていく」と学科長の川瀬真紀教授は話す。体系的な学びの集大成として、卒業プロジェクトでは学生一人ひとりが課題を設定し、学んだ知識やスキル、人脈などを総動員して解決策を導き出す。卒業プロジェクトでは学生5〜6



課題解決演習の授業では、企業が持つ課題の解決策をグループで考える

人に対して担当教員1人がつき、「二人ひとりにしっかり向き合う」（川瀬教授）。

25年3月には1期生が卒業した。起業の道を選んだ学生もいる。「広島は自然が豊か。川が都市環境の中

に組み込まれているのが特に魅力的」と語るのは、水陸両用ホバークラフトの運航を手がける水都広島（広島市）を立ち上げた木村侑平さんだ。広島県は転出超過が4年連続全国最多で、特に若年層の転出が目立つ。木村さんは「広島の魅力的な川辺に人を集めたい」との思いから、5人程度が乗れるホバークラフトを開発し、市中心部の川を有料で運航する構想を考えた。現在はプロトタイプ開発のため、クラウドファンディングを実施中だ。

川瀬教授は「卒業生らを見てみると、自らものを考え、積極的に学び続けようという姿勢は身についてい

るのでは」と評価する。叡啓大学産学官連携・研究推進センターは課題解決人材を育成する「実践の場」も用意する。23年度に発足した「共創プロジェクト」は、企業・教員・学生がチームを組み、企業が抱える生の課題の解決や新規事業の創出に取り組む。授業からは外れた枠組みで単位は付与しない。

まず企業と大学が有償の共同研究契約を結ぶ。そのうえで、プロジェクトマネジメントの専門家でもある教員が企業にヒアリングをし、プロジェクトの内容を決める。プロジェクトに参加する学生は、企業がインターンとして有償で雇用する。学生は企業と対等な立場で新規事業などの新しい価値を「から作りあげる経験」を積む。

持ち帰り用の容器向けに

環境に配慮した蓋の普及を目指すプロジェクトでは、学生の行動力が光った。飲食店やスーパーを訪れ、消費者の目線で店舗スタッフに質問して意見を聞いた。これをもとに具体策を考えてスーパー側に提案した。担当する定金基教授は共創プロジェクトに参加する学生に対し「プロフェッショナルなビジネスチームメンバードと思って迎える」と話しているという。「有償の雇用契約を結び対価をもらうことで、学生も本気になる」と考えるからだ。

「実際に働いてみるってこういうことなんだ、企業で新しい事業を作り出すってこういうことなんだという学びにつながる」（定金基教授）と、未来のチェンジメーカーの育成に意欲を示す。（大久保明日香）